

フェードアウト 木陰の物語

団 士郎

震災、原発事故の
起きた翌年の師走、
福島を訪れる機会があった。

被災した人たちが、
避難している人から
いろいろ聞いた。

そんな中で、
特に印象に残った
話があった。

直接的な
被害の話ではない。



長い公務員生活の後、
定年退職を迎え、
少しの農業と地域の
世話をして暮らしていた
男性の語ったことだ。

「今年もまた、秋になると
柿はどっさり実りました。



いつものように
剥いてつるして、
干し柿にしました。



お付き合いの長い人たちに
毎年、お歳暮として
送らせて貰っているんです。



新年にいただく年賀状には
いつも、そのお礼と
美味しかったの一言が
添えられています。



しかし今年、
たかさんの干し柿を見て
思いました。



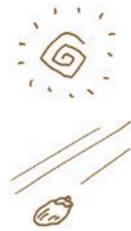
除染のことが
連日ニュースになります。



そんなところから、
干し柿が届いたらどうでしょう。



ここで突つて、
この太陽と風に
さらされた干し柿



口に入るモノだけに、
やはり不安は
強いのではないだろうか。



私の計は
線量計で測ってもらって
大丈夫だったんですよ。



でも、送られた人の
気持ちを想像しますとね...



不安だから食べずにおいて、
年賀状には、いつも有り難うなんて
書かせてしまうことに
なるのではないかと...



そんなことが
頭をよぎりまして。



まさかこんなことになるとは...

私のことなど、
何でもないことです。



避難地域に
指定され、
何も持ち
出せないで
避難所暮らしの
知人もたくさん
います。



それでも、
ただ寂しくてね。



どこにも送らず
山のような干し柿を、
穴を掘って埋めました。



原発事故は
こんな風に
いろんなものを
壊してるんだと
思いますよ。



悔しいね。
事故が起きるまで、
原発のことなんて
何も考えてなかった。



もう、干し柿を作ることは
ないと思います。



家族は食べないから、
作っても仕方がない。



それでも毎年、
柿はなるだろうね。



カラスは
大喜びかもしれないけど...」



長い時間をかけて
築かれてきた、
人との繋がりを、
原発事故は壊した。



賠償対象に
ならないものにも、
たくさん
かけがえのない
ものがあった。



あれから約5年。



片付いてもないのに、
傍観者の気分の中だけで
フェードアウトが
始まっては
いないだろうか。



離れた場所に
いる者こそ、
簡単に忘れて
しまわず、
もっと怒り
続けなければ
ならないのではないかと。



そうしなければ、
また、新たな厄災が
生まれ出るだろう。



被災地で起きたことを題材に漫画を描くことは慎重でした。事実関係やプライバシーが気になったのではありません。それを描くことが、良きものとして届くかどうかに確信が持てなかったのです。もとより、被災地を取材して漫画にする気持ちはありませんでした。

震災直後、日本中で間接的な影響を受けた事象にたくさん出会いました。それは、私達の社会が仕組みを持って出来上がっていることを改めて感じさせてくれました。何事も渦中の当事者だけに、関わることではないと強く認識させてくれたのです。そして5年目、初めて福島で耳にした話をひとつ

描いてみました。受け止め方はいろいろでしょうが、原発事故被害は今も、何も終わっていません。取り返しのつかないことを起こした社会は、そう簡単に忘れてはならないことを戒め続けたいと思います。これはあの会社の問題ではなく、私達の社会の問題です。